

修士論文(要旨)
2015年1月

青年期の甘えの諸相－親密性と個人志向性の否定的側面－

指導 井上 直子教授

心理学研究科
臨床心理学専攻
213J4001
浅原 千鶴

Master's Thesis (Abstract)
January 2015

Aspects of Adolescent *Amae*
Intimacy and the Negative Aspects of Individual Orientation

Chizu Asahara
213J4001
Master's Program in Clinical Psychology
Graduate School of Psychology
J. F. Oberlin University
Thesis Supervisor: Naoko Inoue

目次

問題の背景と所在・目的	1
方法	1
結果・考察	1
1) 各尺度の因子分析	1
2) 各尺度の下位尺度間得点の相関分析	2
3) 「相互依存的甘え」と「屈折した甘え」の高低 4 群における各下位尺度得点の一要因分散分析	2
引用文献	

問題の背景と所在・目的

「甘え」は対人関係を円滑にする上で不可欠なものであり、素直で健康な甘えを適度にもつことは、良好な友人関係を構築する上での促進的要因になると考えられる(玉瀬・富平,2007)が、甘えには「健康で素直な甘え」と「自己愛的で屈折した甘え」があり、それらがどのような対人関係の特徴と関連しているかについては明らかではない。

そこで、本研究では甘えを玉瀬・相原(2004)の多元的「甘え」尺度を用いて、「屈折した甘え」と「相互依存的甘え」の高低により4群で捉える立場を取り、青年期後期を対象とした研究の第一歩として、対人関係の中でも親密性(谷・原田,2011)と個人志向性の否定的側面(伊藤,1995)を取り上げることが目的とした。

方法

都内私立A大学に在籍する18歳から24歳の大学生男女328名を対象とし、質問紙調査を実施した。本研究は、桜美林大学研究倫理委員会の承認後、2014年7月の期間に調査を実施した(2014年5月受理、受付番号14003)。

分析にはSPSSver22.0とMicrosoft Excel 2010を使用し、各尺度の因子構造を確認するための確認的因子分析を行った後、下位尺度間の相関分析を行い、多元的「甘え」尺度の「相互依存的甘え」と「屈折した甘え」の高低で、4群に分けて、各下位尺度得点の一要因分散分析を行った。

調査に用いた質問紙は、以下の通りであった。

- 1) 甘えを健康的ー不健康的の次元ではかるための尺度:多次元的「甘え」尺度(玉瀬・相原(2004)より作成。甘えを「素直で健康な甘え」と「屈折した甘え」の両面を測定するための尺度で、20項目からなり、4件法にて回答を求める。)
- 2) 親密性をはかるための尺度:親密性尺度(谷・原田(2011)より作成。1因子10項目から成り、7件法で回答を求める。)
- 3) 個人志向性の否定的側面をはかるための尺度:個人志向性・社会志向性N尺度(伊藤(1995)より作成。今回は、個人志向性の否定的側面だけを測定するため、個人志向性N尺度の6項目のみ5件法にて回答を求める。)
- 4) フェイスシート:対象者が18歳から24歳であるかどうかを確認するための年齢と学年、性差を検討するための性別を問う項目

結果・考察

本研究では、調査対象とした大学生男女に328部配布したうち、回収数が304部、分析対象とした有効回答数は280部(有効回答率92.11%)であった。その内訳は、男性103名、女性177名、平均年齢は19.58($SD=1.44$)歳であった。

1) 各尺度の因子分析

多元的「甘え」尺度は、2因子構造を仮定して、最尤法・Varimax回転による因子分析を行ったところ、.35に満たない6項目を除外し、最終的には、「屈折した甘え」(9項目)と「甘え受容」(5項目)からなる2因子が認められた。本研究は、甘えを「屈折した甘え」と「相互依存的甘え」の高低で4類型に分類し、それぞれの類型がどのような特徴を示すかを検討することを目的としていたが、因子分析の結果から、「屈折した甘え」と「相互依存的甘え」の一部である「甘え受容」のみを、以下の分析では扱うことにした。

親密性尺度に関しては、.35 に満たなかった 1 項目を除外し、最終的には 1 因子構造 9 項目が認められ、谷・原田(2011)とほぼ同じ結果となった。個人志向性 N 尺度については、1 因子構造 6 項目が認められ、伊藤(1995)と同じ結果となった。

2) 各尺度の下位尺度間得点の相関分析

多元的「甘え」尺度の「屈折した甘え」得点の平均値は 2.01($SD=.51$)点、「甘え受容」得点の平均値は 2.90($SD=.58$)点であった。「親密性」得点の平均値は 5.19 点($SD=1.02$)、「個人志向性の否定的側面」得点の平均値は 3.06($SD=.81$)であった。

各下位尺度間得点の相関分析を行った(Table1)。結果、「屈折した甘え」と「甘え受容」の間には相関が示されず、「屈折した甘え」と「親密性」の間には弱い負の($r=-.31, p<.001$)、「屈折した甘え」と「個人志向性の否定的側面」の間には弱い正の($r=.31, p<.001$)、「甘え受容」と「親密性」の間には比較的強い正の($r=.45, p<.001$)、「甘え受容」と「個人志向性の否定的側面」の間には弱い負の($r=-.27, p<.001$)、「親密性」と「個人志向性の否定的側面」の間には弱い負の相関が示された($r=-.24, p<.001$)。

「屈折した甘え」は自分の欲求を満たすだけで、相手からの欲求を満たすという相手側の視点を含まないために、相手の視点を含む「親密性」と弱い負の相関が示され、また、自分の欲求を満たすために、相手の好意をあてにしすぎて、自己中心的な振る舞いをしてしまうことから、「個人志向性の否定的側面」と弱い正の相関があると考えられた。逆に「甘え受容」は相手の欲求を認識して甘えを受け入れるため、「親密性」と比較的強い正の相関が示され、相手の好意をあてにして振る舞う「甘える」という行為も適度であり、他者への調和や共感を欠いた利己性や自己愛を捉える「個人志向性の否定的側面」と弱い負の相関があると考えられる。また、「親密性」と「個人志向性の否定的側面」は、「親密性」が人間関係の中で互いの欲求を認め合い、相互に欲求を満足させられるような関係性のことを指すのに対し、「個人志向性の否定的側面」は他者への調和や共感を欠いた利己性や自己愛を測定しているため、弱い負の相関があると考えられた。

Table1 多元的「甘え」尺度と親密性、個人志向性の否定的側面との関連

	屈折した甘え	甘え受容	親密性	個人志向性の否定的側面
屈折した甘え	—	-.11	-.31 **	.31 **
甘え受容		—	.45 **	-.27 **
親密性			—	-.24 **
個人志向性の否定的側面				—

** $p<.001$

3) 「屈折した甘え」と「甘え受容」の高低 4 群における各下位尺度得点の一要因分散分析

全被調査者平均値(「屈折した甘え」の $M=18.09$ 、「甘え受容」の $M=14.52$)を基準とし、「屈折した甘え」・「甘え受容」について、高・高群(HH 群 60 名)、高・低群(HL 群 60 名)、低・低群(LL 群 69 名)、低・高群(LH 群 91 名)の 4 群に分けた。

一要因の分散分析の結果、「屈折した甘え」($F(3,276)=133.60$)、「甘え受容」($F(3,276)=129.95$)、「親密性」($F(3,276)=19.85$)、「個人志向性の否定的側面」($F(3,276)=12.50$)のすべてにおいて、1%水準で有意な差が認められた。Tukey 法による多重比較の結果をまとめると、Figure1 のような特徴を示した。

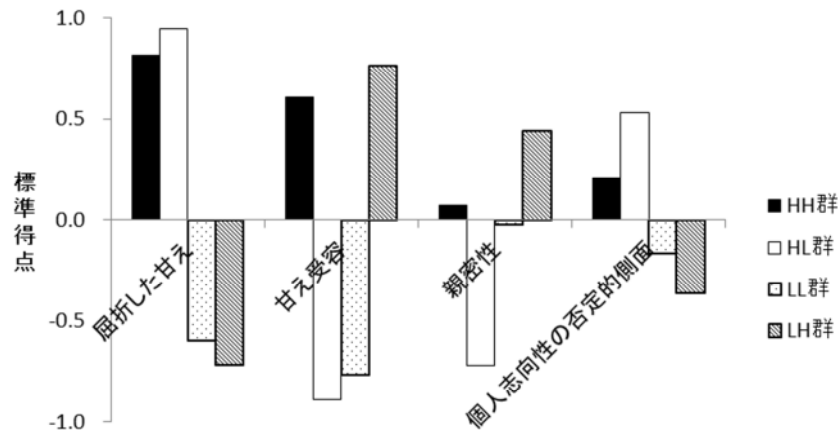


Figure1 各群の諸特徴

各群の特徴について考察する。「親密性」が中程度あり、「個人志向性の否定的側面」が高いHH群は、相互の欲求を満足させ合うことで深い人間関係を築くこともできる面もあるが、他者への調和や共感を欠いた利己性や自己愛がある面も特徴的であると考えられた。「親密性」が低く、「個人志向性の否定的側面」が高いHL群は、相互の欲求を満足させ合えずに深い人間関係を築けず、他者への調和や共感を欠いた利己性や自己愛が高い群であると考えられた。「親密性」が中程度あり、「個人志向性の否定的側面」が低いLL群は、相互の欲求を満足させ合うことで深い人間関係を築くこともできる面もあり、他者への調和や共感を欠いた利己性や自己愛も低い群であると考えられた。「親密性」が高く、「個人志向性の否定的側面」が低いLH群は、相互の欲求を満足させ合うことで深い人間関係を築くことができ、他者への調和や共感を欠いた利己性や自己愛が低い群であると考えられた。

今後の課題としては、本研究は、多元的「甘え」尺度を因子分析した際に、「甘え希求」の因子負荷量が満たず、「相互依存的甘え」としてではなく、「甘え受容」のみを扱った。今後の研究では、素直に甘えたいという「甘え希求」を甘えの概念としてどのように位置づけるかをあらためて検討していく必要があると考えられる。

引用文献

- 伊藤美奈子 (1995). 個人志向性・社会志向性 PN 尺度の作成とその検討 心理学研究, 13(1), 39-47
- 玉瀬耕治・相原和雄 (2004). 大学生の「甘え」と特性 5 因子との関係 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要, 13, 23-31
- 玉瀬耕治・富平美智子 (2007). 大学生の「甘え」と友人関係 帝塚山大学心理福祉学部紀要, 3, 59-72
- 谷冬彦・原田新 (2011). 新たな親密性尺度の作成 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 5(1), 1-7